住環境改善に係る什器類の開発研究
－子供部屋の環境の改善－

浅 川 光 臣

Developments and Studies of Furniture Used for Living Enviromental Inprovement.
－A Proposal of System Furniture for Better Childrens Room.－

Mitsuomi ASAKAWA

1. はじめに

一昨年度に書斎、昨年度に玄関の環境改善の提案をしたが、今年度は子供部屋を対象とした。事前の住宅調査[1]では、子供のいる家庭の85%に子供部屋があり、中で子供1人に1部屋を与えている家庭が89%ある。欧米先進国では、寝具がベッドということもあって、ある年令になると個室が必要になるが、数値をみる限り日本でも子供に個室の時代に入ったといえると思う。日本では子供部屋の機能の重点は、勉強にあって就寝ではない。子供には子供の考え、希望、生活があり、大人には子供に対する考えがあるので双方が相談しながら部屋を構成できるような、そして成長の節目には構成換えや増設で適切な環境づくりができるような、そんなシステム家具の開発が狙いである。幼児から大人になるまで、日々に変化する生活や体格に適合する室内環境を整えることは理想だが、現実的には不可能なので、節目になると思われる4期を設定して開発設計した。

2. 概　　要

2－1　期別概要

第1期（3～8才）・そろそろ親の手を離れ、自分で遊びを創って過ごせるようになる時期から小学校低学年までの時期である。自分の遊び道具は自分で片づけられるし、就学すれば学用品や衣類の整理もできる。必要な什器としては、就学前まではベッド、玩具収納用家具、絵本収納用家具があれば足り、就学後はこれに机、椅子、工作台、タンスもしくは衣類用ロッカーが加わる。就学後は広さは4、5畳以上が望ましい。

第2期（9～13才）・小学校高学年から中学校中期である。書籍類が増え、衣類は種類、量共に増えるのでタンス、ロッカー、棚類の増設と趣味用品、スポーツ用品収納用家具の新設更には友達づきあいも生ずるので長椅子も必要になる。6畳間ではやや手狭で8畳間なら申し分ない。

第3期（14～17才）・生活は勉強中心の時期であるが、趣味の範囲が広がり本格化してくるのもこの頃からである。室内で過ごす時間が多いので、室環境を整えることが望ましい。棚類の増設と女子にはドレッサーもしくはこれに替る什器が必要になってくる。

第4期（18才以上）
勉強、趣味そしてつき合いと大人の生活になる。家具類をパーティション代りにレイアウトして部屋の雰囲気を変えられるよう、事情が許されるなら10畳くらいの部屋が望ましい。

2－2　家具の概要とレイアウト例

A　ベッド（図1）：専有面積が広く幼児期には空間が勿体ないとも思えるが、母親とのかかわりなど汎用性に富みまた、体格の変化に応じて交換するのでは不経済なので大人用の寸法にした。幼児期にはころげおちないよう側板を上げて使える

構造にし、下部に毛布、シーツ類の収納部を設けた。

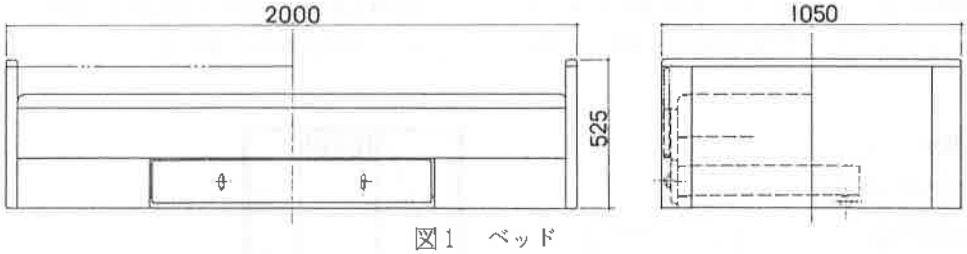


図1　ベッド

B　小ロッカー（図2）：玩具、縫いぐるみ、スポーツ用品その他小物の収納を想定した小型家具である。幼児期には扉を外して台車にセットすれば自体が玩具代りになる。

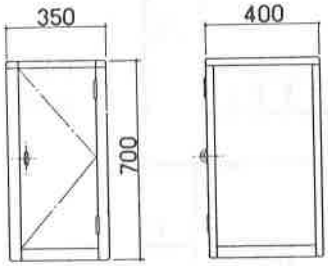


図2　小ロッカー

D　机（図4）：体格の個人差、男女差そして成長の過程全てに対応させることはできないので、表1の数値[2]を参考にして高さを500、600、700の3段階に設定して替えられる構造にした。算式は次による。

机の高さ28（座高÷3－1）－下腿高

C　小棚（図3）：小物類、書籍類の収納を想定し、抽斗部と棚部を組合せた小型家具である。

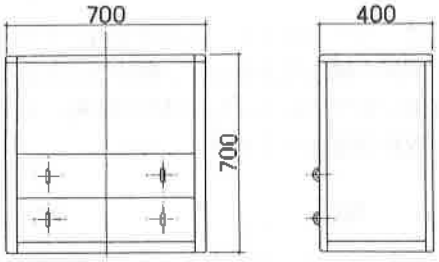


図3　小　棚

表1　人体計測値

年齢 / 部位		6	11	16
座　高	M	66.04	80.34	90.68
	SD	2.18	4.22	2.75
下腿高	M	28.86	36.00	42.41
	SD	1.89	2.38	2.10

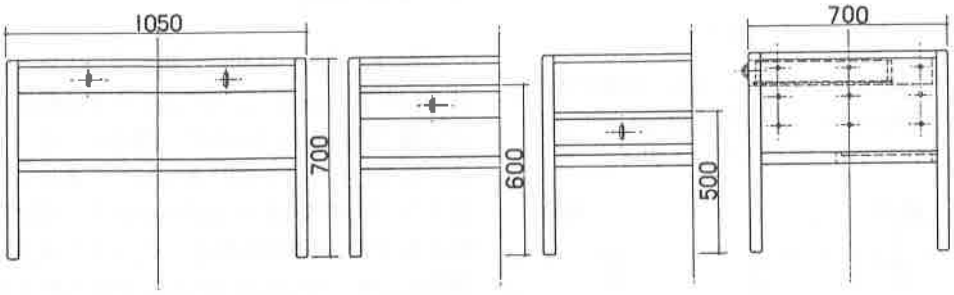


図4　机

E　工作台（図５）：児童、生徒の時期には使用頻度は高いと思う。甲板と台とを別体にして、台を逆にしてセットすれば高さが600、700の２種類になる。

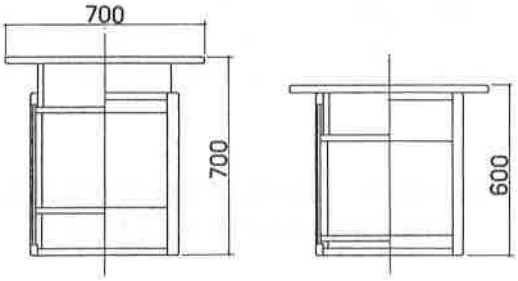


図５　工作台

F　ロッカー（図６）：人の手を借りず自分で自由に部屋を構成できるよう、収納機能を損なわない範囲で小型にした。内部は衣類収納、スポーツ用品収納等用途により異なってくる。

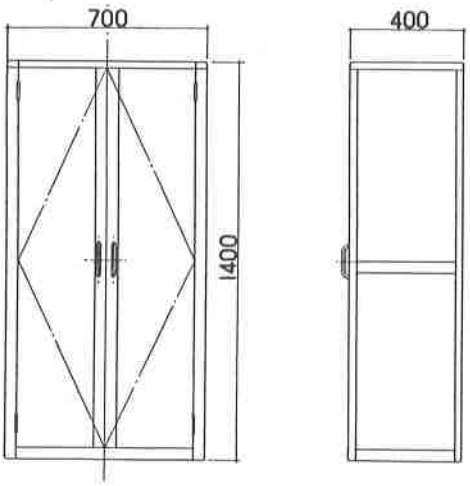


図６　ロッカー

G　ベンチ（図７）：ベンチの機能と収納の機能とを半々に考えた。ベンチとしては友人が来た時、寛ぐ時に使用するが頻度は少ないと思う。

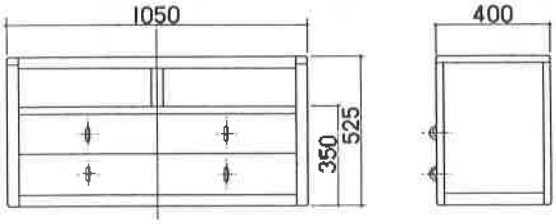
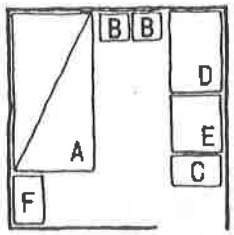
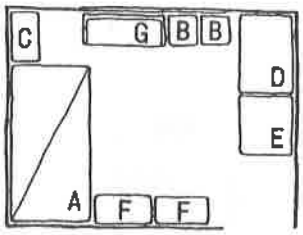


図７　ベンチ

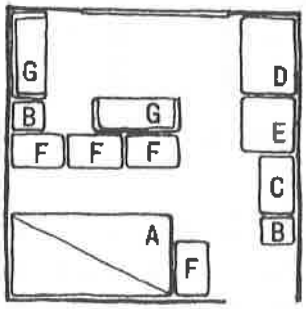
部屋の構成例として３例を示す。どの時期でも広い方がよいが、家庭の事情がまちまちなので目安として考えたものを示した。



4.5畳
第１期の例



６畳
第２期の例



８畳
第３、４期の例

図８　レイアウト例

３．おわりに

子供は、幼ない時期には親が良いと思う育児方法を行なうしかなく、自己を主張する時期がくれば管理の余地を残すなかで、聞く耳をもって任せるところは任すことが望ましい。つまりは子供が籠もりたい時に籠もれる場所があり、別に豊かで暖かな家族の団欒の場があって、それは家族が大々別なことをしていてもお互いの存在を感じあえる場所で、そういう家の中の部屋の相互関係があっ

てはじめて子供部屋論が生きてくると思う。ここではそれぞれの時期に在った方がよい家具、什器類がもっと沢山あるが、全てを網羅せず基本型として提示した。部屋の主が自分流に構成できるということ、並置や積み重ねて使う場合にすっきり構成できること等を考慮した。構造材はナラ材、他はカラマツ材を使う。長年使うことを想定しているので、色は自然色に近い暖色系が良いと考えて極く淡い紅色を選び、アクセントをつけるために構造材をやゝ濃くしてツートーンカラーにし、塗膜の強いポリウレタン塗装とする。幼児期から使うので安全性を配慮して、凸部は全て丸面をとり、取手の材質は合成皮革にした。

事前の調査[1]では、何らかの形で子供部屋のある家が非常に多かったので、子供の成長により良い環境を与える部屋づくりをする、そのために必要な家具、什器類への需要は大いに見込めると考えている。業界の方々の参考になればと思い提案した。

文　献

1) 浅川光臣：住宅実態調査・子供部屋の実態（未発表）

昭和55年９月から58年５月までに関東近県で建てられた住宅70例の調査結果

子供のいる家	63軒
子供部屋のある家	54軒
子供の総数	97人
子供部屋の総数	90室
１人１部屋の家	48軒
２人１部屋の家	5軒
３人１部屋の家	1軒
子供部屋の総面積（畳換算）	620畳

2) 小原二郎等：人体計測値図表、医歯薬出版株式会社　(1968)，P19